

聖霊降臨後第4主日

2020年6月28日

平和ではなく、剣をもたらすために来たのである



日本聖公会東京教区
東京聖三一教会

聖霊降臨後第4主日

2020年6月28日

平和ではなく、剣をもたらすために来たのである

司祭 シモン 林 永寅

もう2週間もすると、教会で信徒の皆さんが共に礼拝を捧げられるようになります。感染リスクを減らすために当分の間「聖餐式」の代わりに「み言葉の礼拝」を行うことになりましたが、礼拝に渴いていた方々にとってはその渴きを癒すよい知らせでしょう。共に喜びながら、慎重に礼拝を準備していきましょう。

私は普段音楽をあまり聞きませんが、最近よく聴いていた音楽が一つあります。それはヴェルディのオペラ、「ナブッコ」なのですが、その中の「ヘブライの捕虜たちの合唱」をよく聞きました。ヴェルディはこのオペラ、「ナブッコ」を通して大衆的に知られるようになったと言います。名声にふさわしく、このオペラの曲は美しく、力強く、勇壮に感じられます。けれどもなんだか悲しい気もします。それは、このオペラにバビロンに連れて行かれたイスラエルの民の物語が込められているからでしょう。

イスラエルの民がバビロンに連れて行かれたのは紀元前587年です。その時、エルサレムの神殿は破壊され、多くの民が捕虜として捕らえられて連れて行かれました。彼らはバビロンで奴隷のように暮らしていました。彼らにとっては公の礼拝も禁止されていました。客観的にも、彼らが故郷に戻れる希望はまったくありませんでしたし、エルサレムの神殿で礼拝をささげるなんていうことは夢にも思わなかったでしょう。オペラ「ナブッコ」には、その時のこのような悲しみが込められています。「ナブッコ」とは、イスラエルの民を捕虜にして連れて行ったバビロンの王である「ネブカドネツアル」をイタリア式に縮めて呼んだものであるそうです。

ところで、私がこの「ヘブライの捕虜たちの合唱」をよく聞いていたのは、

コロナウイルスによって教会でともに捧げる礼拝ができなくなった私たちの境遇が当時のイスラエルの民と似ていると思ったからです。もちろん、私たちは奴隷生活をしているわけではありません。けれども行動が制限され、自由でないことは同じでした。教会で共に集まって礼拝を捧げることができなくなった境遇も同じでした。それで共感を覚えたのです。

私がこの曲をよく聞いたのにはもう一つの理由もあります。それは、大事なことを思い出したかったからでもあります。その大事なことは、神様はご自分の民は必ず救ってくださるという約束です。

バビロンで捕虜として生活していたイスラエルの民の暮らしは絶望的でした。それにもかかわらず、彼らは決して絶望しませんでした。神様が彼らを守ってくださるとおっしゃったこともあるし、イザヤやエレミヤのような預言者も神様の約束を思い起こしながら励ましてくれたからです。イスラエルの民はこの信仰を大切に守ってきました。その結果、イスラエルの民は50年ぶりに自分の故郷に戻っていくことができました。バビロンを滅ぼしたペルシアの皇帝キュロスがイスラエルの民の帰郷を許したのです。人類史上類例を見いだすことのできない出来事でした。この出来事は当時の国際政治的な出来事と繋がっているかもしれませんが。けれども、想像すらできなかったことだったので、イスラエルの民らはそれが神様の恵みであることを確信しました。聖書にも、「主はかつてエレミヤの口を通して約束されたことを成就するため、ペルシアの王キュロスの心を動かされた」(2 歴代 36:22)と記されています。

ところで、イスラエルに戻ってきた民らが最初に考えたのは何でしょうか？ それは礼拝です。「イスラエルの民」という言葉は信仰者を意味し、信仰者とは他ならない「礼拝をささげる人」という意味です。私たちは、イスラエルの民、つまり信仰者たちが礼拝をいかに大切に思っていたのかを、アブラハムのカナンの地の到着の出来事とエジプトから脱出の出来事を通して分かります。アブラハムがハランを離れ、カナンの地に着くや否やしたのが礼拝であり(創12:7、8)、神様がエジプトで奴隷生活をしてきた民らを救ってくださったのも礼拝のため(出3:12)でした。

しかしエルサレムの神殿は破壊されていました。それゆえ、彼らはまず神殿を再建しようと努力しました。神殿が完成されると、彼らは礼拝を捧げました。ところで、この礼拝で注目されることが一つありました。それは、彼らが神殿に集まって「主の戒めと法と掟をすべて守り、実行することを誓い、確約した」(ネヘ 10:30)ということです。彼らは自分たちの心を捧げたのです。このようなことが旧約聖書のエズラとネヘミヤに詳しく記されています。

このような昔の信仰者たちの人生を振り返りながら、礼拝を再び新たに始める前に、私は皆さんに一言申しあげたいことがあります。それは、新たに始まる礼拝で、私たちもバビロンから戻ってきたイスラエルの民が捧げた誓いと確約のようなものを捧げなければ、ということです。

今日ご一緒に読んだ聖書日課のみ言葉は、新たに礼拝を捧げようとするわたしたちの心の準備のためのみ言葉でもあります。

一般的に信仰者が信仰生活をするのは、そしてイエス様を信じて従うのは、心の平和を得るためであると言います。また、祝福を受け、救いに預かり、慰めと勇気を得るために信仰生活をしていると思います。このような信仰は大切なものです。確かに平和に恵まれ、祝福を受け、救いに預かり、慰めと勇気を得られます。しかし、信仰生活が長くなれば長くなるほど、ここに留まらず、もっと成熟した信仰生活のために一歩前に進んでいくべきではないでしょうか。

今日の福音書のみ言葉は、「イエス様が本当にこのようなことをおっしゃったのか」と思われるほど違和感を覚えます。イエス様は、「平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ」とおっしゃり、「家族の間に敵対させるために来た」とおっしゃいました。さらには、「自分の家族の者が敵となる」ともおっしゃいました。本当に戸惑いです。しかし、このみ言葉の前後を注意して読んでみると、これは信仰的な成熟のためのみ言葉であるということが分かります。実は私たちは家族のことでイエス様のみ言葉に従えず、適当に妥協しながら生きていることも多いからです。イエス様がおっしゃった「家族の間の敵対」とは、イエス様のみ言葉を真剣に考え実践

しようとする時に経験する、信仰的な成長痛であるかもしれません。信仰的な成長痛がある時、心も痛くなるかもしれませんが、成長痛の時期を過ぎて成熟するにつれて、家族と和解し、より一層信頼できる関係になるでしょう。もしかしたら成熟した信仰の道を共に歩むことができるようになるかもしれません。

イエス様は、「自分の十字架を担って私に従わない者は、私にふさわしくない」ともおっしゃいました。このみ言葉は、現実に住み、惰性的に生きている様子に対する叱責であるかもしれませんが、私たちに委ねられている信仰的な使命をちゃんと行いなさいという励ましであるかもしれません。このみ言葉も私たちの信仰の成長のためのものなのです。したがって、新たに始まる礼拝で、私たちが奉獻しなければならないのは、私たちの成熟した信仰でなければならないでしょう。

今日ご一緒に読んだイザヤ書には、「その日には、主はただひとり、高く上げられる」という信仰者の告白が二度も繰り返されています。そしてローマ書には、「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けた」という信仰の根本について記されています。これは、私たちがキリストと共に復活し、成熟した信仰者になる道を示してくれるみ言葉であり、揺るぎない信仰のためのものです。新たに始まる礼拝で、イザヤ書に記されている告白が私たちの告白となり、私たちもキリストと共に復活しようという心を持って礼拝をささげるようになれば、神様も喜んで私たちに祝福してくださいませ。

「ヘブライの奴隷たちの合唱」の最後の節の歌詞はこのようなものです。

「エルサレムの残酷な運命のような辛く悲しい詩を歌うけれども、主は私たちに慈しみを施してくださいませ。」

この一週、いつも私たちを成熟した道に導いてくださる神様の恵みが、皆さんと皆さんの家庭に豊かに満ち溢れますように心よりお祈りいたします。